

News Letter

Vol.35

2024.12.10

私たちと国連

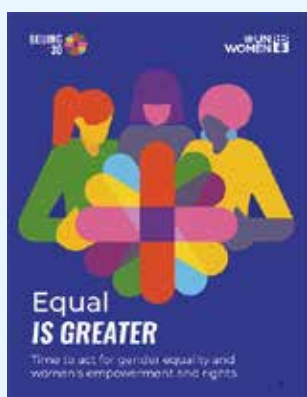


“私らしく生きたい” ～女性の生きづらさの 改善に向けて～

来年は「北京+30」の年、国連は？
そして日本の女性政策の進展は？

「女性の権利は人権である」とヒラリー・クリントン（当時米大統領）「世界女性会議」（通称：北京会議）での講演で叫ばれてから、30年が経過しました。日本は、世界の女性のための憲法である「女性差別撤廃条約（CEDAW）」を1985年に批准しましたが、未だ多くの課題が残されたままです。本年10月に提出された国連女性差別撤廃委員会（CEDAW）による日本への最終見解の内容は…。

2025年
北京宣言は
採択から
30周年を
迎えます



UN Womenサイトより

この11月の各新聞紙上では、『夫婦別姓「待ったなし」』、『「個人通報」制度25年棚ざらし』などの記事が大見出しで掲載され、国連女性差別撤廃委員会（CEDAW）の「最終見解」のニュースが取り上げられていました。

女性差別撤廃条約（CEDAW）の批准国（2022年現在189）に課せられている4年毎の報告に対し、委員会は「勧告」を含む最終見解を下します。今回の対日審査は8年ぶりでもあり、ジュネーブの国連には、国内のCEDAW関連の活動団体などから約90人が駆けつけ、日本審査日である10月17日の委員会を傍聴しました。

前回の勧告で指摘された「女性の結婚可能年齢の男性と同じ18歳への引き上げ」や「女性のみ課される離婚後一定期間の再婚禁止規定の全廃」などは実現しました。しかし4回もの勧告を受けた「選択的夫婦別姓」については、「夫婦同姓を義務づける民法750条を改正する措置が何ら取られていない」と指摘され、前回からの進展が全くないとの厳しい評価を受けました。政府は「個人の倫理や家庭観に関わるので、国民的合意形成が必要」との理由を述べてきましたが、「個人の倫理」という表現には、女性をひとりの個人とはみなさない社会通念の冷たさがあり、女性は非婚や少子という無意識の抵抗をしているようにもみえます。CEDAWは家父長的な社会構造が問題であるとの指摘をしながら、実質的平等の実施を求めています。

また、25年間、何ら進展を見せなかったCEDAWの「選択議定書」（国内で訴えを認められなかった個人がCEDAWに人権救済申し立てができる個人通報制度が含まれる）について日本は、司法制度との関連で問題を生じる恐れがあり慎重に検討すべきと、25年間批准を先送りしてきました。外務省は法務省との研究会を設置し、20年間に亘って検討（非公開）し続けています。そうした状況に対し、この議定書の批准要請意見書の発行を地方議会に働きかけてきた「CEDAW実現アクション」の集計では、10月現在349の自治体が批准を求める意見書を採択しています。

さらに、女性の性に関する自己決定権の侵害であると批判されている緊急避妊薬などへのアクセス改善、性的暴行によって妊娠した場合の中絶にも原則として配偶者の同意が必要（締約国中11か国のみ）などの「性と生殖に関する健康と権利（リプロダクティブ・ヘルス＆ライツ）」への早急な対応も求められ、2年以内の実施報告が課せられました。日本の生殖医療に関わる費用は、他国の状況に比して法外な価格となっています。

「女性の権利を国際基準に」との声が高まっています。人権はどの国に生きる者にも普遍的な価値をもたらすもので、1国の為政に左右されてはなりません。既存の「決まり」を見直す知力・判断力を身に付け、次世代に負の遺産を遺さない努力を続けるようではありませんか。（城倉純子）

参考：新聞各紙、OP-CEDAW アクション全体会報告情報ほか



国連ウィメン日本協会主催 日本女性学習財団共催

【国際ガールズデー】

オンラインチャリティイベント 「紛争下における南スーダンの少女たちの状況」

講師：会田有紀氏 UN Women 南スーダン事務所モニタリング&リポーティングスペシャリスト

10月11日は、「国際ガールズデー」。今回の現地レポートは、南スーダン事務所からです。現在、現地事務所スタッフは50人、うち32人が南スーダン人、18人が国際スタッフ。日本人は会田有紀さん1人です。以下、会田さんによる貴重な現地報告の要約です。

独立後も紛争に：東アフリカ中陸に位置する南スーダン共和国はキリスト教や伝統宗教の国で（スーダンはムスリム）、人口は約1200万人。2011年にスーダンから独立した多民族国家です。国民の多くは1日1.9ドル以下の生活をし、17歳以下の少女が最も多い層となっています。

4回の大きな紛争を経て、直近では38万人以上が死亡、国民の多くが何かしらのトラウマを抱え、平和な状態を知りません。220万人以上の難民が隣国に避難し、国民の約20%が難民生活を余儀なくされています。

内戦の影響：ピポール郡（東部上ナイル地方）にて長年対立してきた部族間衝突が2020年にあり、200人以上が死亡、1800人以上の女性と少女が誘拐されました。2023年4月のスーダンの内戦では80万人のスーダン難民が南スーダンに避難、少女はレイプされ、少年は誘拐されている状況です。2か所ある一時滞在先には、4000人収容の処へ9000人以上が入っています。2023年7月からは、1日1600人がスーダンから避難してきています。支援は不十分で、薪を売って収入を得ていますが、薪を拾いに行く際には危険が待ち受けています。トイレの数も不足、茂みの間で用を足さざるを得ず、蛇に噛まれたり、レイプが起きたりしています。

水害と少女の状況：2019、2022年の洪水のピーク時には、330万人に影響が出ました。避難先からは通学できず、少女の妊娠や結婚の強制（男性側が女性側に

牛を贈る習慣があり）が横行しました。学校で貰っていた生理用品が入手困難になり、下着は2枚のみといった状況でした。

南スーダンの教育：国民の70%が30歳以下で、半数は文字が読めず、15歳以上の少女の84%は読み書きができません。強制結婚が背景としてあります。18歳以下の結婚は禁止ですが守られず、13か14歳頃から結婚を強制されています。

男性優位の社会：財産・家族内の諸事はすべて男性が仕切り、女性は父・夫に従い、水汲みは少女の仕事になっています。女性や少女の58%以上が暴力を経験、女性の27.1%が仕事を持てず、銀行口座を持っている女性は4.7%にすぎません。

UN Womenと日本の活動：UN Womenは、女性の参画とリーダーシップを啓発してきました。政府はリーダーシップポジションの35%を女性が占めると決めています。未だ実現せず、その支援は続いています。

日本はトップドナー国で、2015年から自立支援として識字支援や自動車修理などの職業支援をしています。女性グループを作り、お金の貸借や貯蓄を増やすなどの指導をしています。日本からの資金を受けて、レストランをオープンした女性もいます。

質疑応答では、難民キャンプのセキュリティは、国連の平和維持軍の駐留により保たれている。活動者の安全は平和維持軍のエスコートの下に守られ、車移動が基本で徒歩は禁止されているとのことでした。また、5人の副大統領のうち1人が女性。それで大統領に議定書のサインを頂くことができた。女性の政治参画が最重要と考えてUN Womenで行動している、と話を結びました。（城倉純子）



「第79回国連総会政府代表顧問歓送会」報告

日本が国連に加盟して以来、国連総会政府代表団に民間女性の参加を求める活動が「国連NGO国内女性委員会」によって続けられ、実現・実施されてきました。昨年度に、国連総会第三委員会（「社会、人道、文化」を議題とする）に出席する政府代表顧問に日本女性法律家協会の紙谷雅子氏（学習院大学名誉教授）が決定、本年も10月初めから約5週間の会議出席に先立ち、9月24日（火）午前、新宿の婦選会館で歓送会が開催されました。

代読による外務大臣からの辞令交付の後、歓送の言葉を日本女性法律家協会の横溝久美会長が述べられ、

次いで紙谷代表顧問からのご挨拶がありました。その後、テーマ「第79回第三委員会の概要と女性分野の進展について」の外務省総合外交政策局人権人道課女性参画推進室清原聖子首席事務官による講演では、安保理決議1325号やWPSの進展を含めたUN Womenと日本との連携強化に言及しての国連女性政策の現況と意義を述べられ、当会の活動の意義を確信しました。引き続き活発な質疑応答、懇談会があり、外務省の新メンバーや本年の国連第三委員会についてのお話も伺い、充実した時間を共有することができました。（牧島悠美子）

「燃えあがる女性記者たち」上映会報告

サンダンス映画祭ドキュメンタリー部門など数々の映画賞を受賞 東京都推奨映画 文部科学省特別選定



7月12日、東京ウィメンズプラザを会場に、インド映画上映会「燃えあがる女性記者たち」を開催しました。10代から90代までの参加者で会場は満席に。上映終了後の感想を語り合う会では、熱心な意見交換がなされました。

この映画は、インドのカースト制度の外側・最下層におかれて「不可触民」として蔑まれてきた「ダリット」出身の女性たちが、新聞社「カバル・ラハリヤ（ニュースの波の意）」を立ち上げ、その記者として果敢に社会の問題に立ち向かう姿を描いたものです。

社会や家族からの圧力に疲弊しながらも必死にやり抜く女性記者たちの姿は、私たちの心を奮い立たせるものがありました。特に、デジタル化に戸惑いながらも使いこなす力をつけていく仲間たちの向上心、知識も経験も豊富なリーダーである主任記者ミーラの揺るがない信念に満ち溢れた姿には、感動せずにはいられませんでした。

参加者の感想から

・「ジャーナリズムは民主主義の源だ」という言葉が心に残りました。どんなに壊れかけても、かすかな「ジャーナリズム」という灯火があるだけで、それが少しでも社会を動かすことにつながっていることに勇気をもらい、女性記者たちの思いに感銘を受けずにはいられませんでした。日本も男女平等だとうたわれていますが、インドと同じようにマイノリティーに厳しい社会であると思います。私たちもマイノリティーに目を向け、聞き、記者たちが知らせてくれる社会状況、私たちが実際に感じたことを知ること、そして自ら発信できるSNSを利用して世界へ届けられる範囲で届けたいと思います。社会の問題について深く考える機会を設けて下さり本当にありがとうございました。(10代 学生)

・インドにおける政治と宗教と身分制度の複雑な結びつきを強く感じた。何も知らないことだらけでこの映画を知ることができて良かった。異文化を感じる場面が大いにありつつも、政治を動かしているのは男性ばかりであったり、女性が虐げられる社会構造は日本と変わらないと感じた。最後に悲しそうな顔をして花嫁衣装に身を包むスニータの映像に、どうしようもないやるせなさを感じた。自分よりも大柄な異性に囲まれ、冷たい視線を浴びせられながら取材をするカバル・ラハリヤの人たちをとってもカッコいいと思った。(20代 大学生)

・ダリットの女性がメディアを自ら立ち上げ、周りも巻き込みながら世間を変える組織になっていったことが素晴らしいと思った。メディアが政治に与える大きさを感じることができた。(10代 大学生)

・ミーラさんや「カバル・ラハリヤ」のみなさんの意志と活動……。大変な差別や命の危機もある中で、報道により社会を変えていく。こんな活動をしている方たちがたくさんいることに勇気をいただきました。(50代)

参加者の皆様、たくさんのご回答ありがとうございました。

・貧富の格差の問題が大変リアルに分かりました。母なるインド・・・?とは言いつつも、深いヤミを考えさせられました。(50代)

・ジャーナリズムと民主主義について、考えさせられると共に、登場する女性記者たちを取り巻く環境にも考えさせられた。DV配偶者に向って「あなたは捨てても仕事は捨てない!」と言う記者。結婚は自由にしたいと言っていた記者は家族を守るために結婚することになったのも印象的だった。「母なるインド」って本当になんでしょうね……。 (50代)

・インドと日本の人権状況は大きな差はないと思った。目に見える階級はなくても、格差と貧困を拡大する政策の結果、最も困っている女性と若者の声が政治に反映していないという点で良く似ている。(60代)

・ごく普通の女性記者が「今のこの社会を変えたい」という思いで、命がけでマフィアや警察や権力側に屈することなく取材を続ける姿に感動しました。日本にも存在している問題に目を向ける必要があるし、無視してはいけなと感じます。声をあげていかなければ、とも思います。(70代)

・ヒンズー教の中のダリット(不可触賤民)が改宗しているのは、女性記者たちの動画の影響が大きいと感じました。女性記者の勇気に感動しました!!女性記者たちが高等教育を受けた人が多く、やはり教育の大切さを実感した。(70代)

・ミーラ記者の「視点」という観点、信念を曲げない気持ちすごい。インドという大国の一部がよくわかりました。SNSの「社会を照らす鏡」として、大きく変化していた様子など。(70代)

・素敵な機会を提供して下さい本当にありがとうございました。また、ともに映画について考える機会があれば是非参加させて頂きたいです。社会について、女性のことについて、映画だけでなく様々な媒体で。(10代 学生)

ご案内 2025年度 定例総会のお知らせ

下記の通り2025年度の定例総会を開催いたします。

本年も昨年同様、総会終了後に交流会を開催いたします。25周年を迎えるにあたりまして、これまでの歩みを分かち合い、ユニフェムからの流れを確認し合いながら今後につなげてゆきたいと思います。是非ご参加くださり、お話をお聞かせください！

日時：2025年2月17日（月）13:00 受付開始

会場：今井館 2階会議室

次第：

第1部 総会（対面にて実施） 13:30～14:40

第2部 交流会「25周年を迎えて」15:00～16:30

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

詳細につきましては、後日、はがきでお知らせいたします。



＜アクセス＞ 今井館

JR 線 駒込駅南口・徒歩12分

都営三田線 千石駅 A4 出口・徒歩5分

南北線 駒込駅2番出口・徒歩8分



事業部から ♪ ♪ 皆様のご協力に感謝します ♪ ♪

国連ウィメン日本協会東京では、UN Womenへの拠出金づくりの一環として、年3～4回程度のバザーを開催しています。出店先は、当会の定例総会（2月）、上智大学同窓会主催ソフィアン・バザー（5月最終の日曜）、国際婦人年連絡会総会（5月末）、清友会主催クリスマスコンサート（上尾市民会館12月末）などです。アジアの女性の就労支援としてユニフェム時代にスタートした折の思いを大切に、ベトナムやインドのグッズなどを中心に並べています。是非お立ち寄りください。皆さまからの温かいご協力のお心を支援先に届けます。



人気のベトナムスカーフと紙小物



たくさんのご寄付・ご協力をいただき有難うございました。

（敬称略）

寄付者（2024年4月1日～2024年10月31日）

牧島悠美子 高木宏子 梅田和子 加藤聖子 長濱節子 白根和味 中務安紀子
碓谷真理 福田文子 飯田寛子 縄田真紀子 立木冬麗 太田恵子 矢代俊子
奥田豊子 鈴木千鶴子 田邊光子 阿部幸子 匿名3件

新入会者

佐藤恭子 小船井美那子



編集後記

◆国連NGO国内委員会（委員長 鷲見八重子）が第18回平塚らいてふ賞（日本女子大学）を受賞されました。1957年以来、国連総会日本政府代表団に「民間女性」を推薦し続けるなどの活動が評価されたとのこと。喜びを共にし、ますますのご発展をお祈りしています。（A）

◆日本のジェンダーギャップ指数(GGI)は先進国の中では最下位の118位。根強い性別役割意識が一向に改善されない。「魚は水が見えない」状態にいる男性に、「当たり前」だと錯覚している考えや習慣の問い直しを、億劫がらずに続けよう！（J）

◆紙面をより見やすくなるようにと、レイアウト変更を試みました。読み応えと見やすさの共存はなかなか難しく模索しています。これからも、皆様にお楽しみいただけるよう内容を第一に編集してまいります。どうぞ皆さまの声もお聞かせください。（N）

ご意見ご感想はこちらまで：E-mail:unwomentokyo@unwomentokyo.org

国連ウィメン日本協会東京

News Letter Vol.35

発行人：会長 城倉純子

発行日：2024年 12月10日

〒167-0042

東京都杉並区西荻北3-11-3-105

Tel/Fax 03-6913-9946

http://unwomentokyo.org